

高目村の椀作り

近世の高目村は高目が本村で、端村として荒木・中野・小清水があり、きもいり肝煎は2人いました。

藩による「移出入品高調」によると、他郡からの入金高に漆椀があり、延享3年(1746)には小荒井組305両余、大谷組30両余、同4年(1747)には297両と20両余とあります。大谷組のほとんどは高目村で生産したものと見られます。

文政12年(1834)、藩主松平容敬巡見時の「御巡見筋手鑑」には、杉山村から上林村(喜多方市山都町)まで27ヶ村の様子が書かれています。その中に、産業の項目があり、高目村だけが塗師とあります。高目村の椀作りは産業といえるほど盛んだったのです。小椀一族でもないのに、なぜ多くの生産ができたのでしょうか？それは、肝煎の努力があったからです。

高目村には木地師の墓が残されています。荒木には夫婦のものがあり、男の竿石は崩れてしまいましたが、女より一回り大きい笠石になります。女の墓は正面に「青露妙安信女(肝煎クラスの戒名) 元禄16年(1702)」、三面には「南無阿弥陀仏」と彫られ、竿石には男女とも唐破風に菊花紋と下がり藤が彫られ、朱と藍に着色されています。

また、高目の肝煎をした福地家の墓地の台石には菊花紋の墓があり、漆窪肝煎福地家の墓所には「浄心禅定門 貞享5年(1688) 妙蓮禅定尼 宝永3年(1706)」と、墓の台石に菊花紋が彫られた墓があります。

これらは肝煎が招いた木地師のお墓になります。肝煎は木地師を招いて地区の人々に技術を習得させ、木地だけでなく漆を塗って付加価値を高めたので、産業と認められるほど発達しました。

文化5年(1808)、村から代官所に出した文書に「村中残らず椀細工産業渡世(なりわい) 致し高目村椀と申うし名産なり」とあります。また文化7年(1810)、村の入金高に「五両三ツ椀越国売り」と書かれています。三ツ椀とは大・中・小が1組になっている椀で、大は飯椀、中は汁椀、小は「かさっこ」と呼んで、新香用に用いました。

高目村の椀作りもブナを伐りつくしたため、天保年間(1830～1844)の末頃に終わってしまったようです。



▲荒木にある木地師の墓



編集後記



今月の表紙
今月は、5月18日に行われた西会津小学校大運動会から。晴天の中、実施された運動会では、赤白に分かれての応援合戦や学年ごとに分かれての徒競走など真剣勝負が繰り広げられました。競技中は真剣な表情で取り組んでいた児童たちもゴールテープを切る瞬間は笑顔に変わるのが印象的でした。

(6ページに関連記事)

暑い日が続いていますが、皆さんいかがお過ごしでしょうか。水分をこまめに摂り、町で開放しているクールシェアスポットを利用するなどして熱中症を予防しましょう。

(伊藤)